

## メデシアとは誰か

——太古の「女神」からエウリピデスの「人間の女」へ、そしてセネカの「魔女」へ——

上 村 く に こ

### (1) 始めに

「母がわが子を殺す」という事件は、神話時代から現代まで、人々の心を揺さぶり震憾させてきた。「自ら産み落とした赤子を殺す」母親は、人間が積み上げてきた文明の基礎を、いともあっさりと根こぎにするように見えるからである。父親の子殺しには、これほどの衝撃力はないように思われる。社会な説明で納得がゆく場合が多いからである。しかし母親が子どもを殺す場合には、「怪物である」「精神疾患である」「社会の犠牲者である」などどんな理由づけを試みても、それが私たちを顫動し、震えあがらせるインパクトを薄めることはできない。

この研究ノートは、エウリピデスが前431年に書いた悲劇『メデシア』と、それから5世紀のちにセネカが書いた『メデア』という2作品を取り上げる。エウリピデスは『メデシア』のなかで、「子を殺す母」のプロトタイプを創りあげたと考えられる。ギリシア神話を記録した記録には「メデシア」という女神は所々に言及されるが、「子を殺す母」という記述は見られない。なぜエウリピデスはこの女神に子どもを殺させることを思いついたのか、それによってどんな新しいメデシア像が創り出されたのかを考えたい。また紀元1世紀になって、セネカは『メデア』を書き、エウリピデスのメデシア像を一変させた。どのようにメデシア像が変えられたのか、それによって「母の子殺し」の意味がどう変わったのかを考えたい。

エウリピデス以来メデシア像は今日にいたるまで、あらゆる国の芸術家たちによって、劇だけでなく、小説、オペラ、ダンス、映画などによって変容し続けている。セネカの『メデア』はこの変容の第一号といえる。メデシア像は女が置かれている状況にもっとも根源的に対峙する先鋭的な女性として、創作者を魅了し続けている。そのような流れを踏まえて、メデシア像が時代とともにどのように変化したか、そしてそれは何を反映しているのかを解明してゆきたい。本論はそ

のための第一歩として、エウリピデス以前のメデシアにまつわる神話を研究し、次にエウリピデスの『メデシア』を、そして最後にセネカの『メデア』を詳しく見てゆきたい。

### (2) エウリピデス以前のメデシア

メデシアという名が私たちの目に現れる資料の中で、いちばん古いものは、紀元前8世紀に書かれたヘシオドスの『神統記』である。このテキストの最後の節で、ヘシオドスは人間の男と交わった女神たちのリストを挙げる。デメテル、ハルモニア、エオス、アプロディテーが列記されたあと、「ゼウスの愛でる王アイエテスの娘」が紹介される。ギリシアの英雄イアソンが、この娘メデシアを、コルキス王アイエテスから連れ出したと歌っている。

(…) アイソンの息子は

眼輝く乙女を 脚速い船に乗せ 粒々辛苦の末  
イオルコスに着き 彼女を咲き匂う妻とした<sup>1)</sup>。

その結果息子メデイオスが生まれ、立派な息子に育てるべく、ケイロンのもとで教育を受けることになった。ヘシオドスは「大いなるゼウスの意志はこうして果たされた」と結んでいる。メデシアはギリシアの英雄が遠いアジアから連れてきた花嫁として紹介されているのである。ホメロスには言及がない。『オデュッセウス』(12巻70行)にはアルゴ船の冒険への言及はあるが、メデシアについては何も触れられていない。

エウリピデスの同時代人であるヘロドトスは、メデシアについて2度触れている。まず1巻では、誘拐されて異国に連れて行かれた四人の女神の名をあげている。イオ、エウロパ、メデシアそしてヘレネである。まずアルゴスの王女イオがフェニキア人によって誘拐された。ギリシアの女神がフェニキアに拉致されたのである。ギリシア人は、その仕返しとしてフェニキアからエウロパを誘拐してギリシアに連れてきた。これ

でおあいこになるはずだったのに、不埒なギリシア人が軍船に乗ってコルキスまで行き、王女メデシアをギリシアに連れてきた。コルキス王はギリシアへ使者を送り、娘を返してほしいと要求したが、ギリシア方はアルゴスの女王イオが掠奪されたおりに補償を要求しなかったのだから、当方も補償しないと返答したという。だからヘレネがパリに誘拐されたとき、ギリシア方がヘレネの返還を迫ったのは、アジアから見ると、自分たちがメデシアを掠奪したときのことを忘れて、とんでもない要求をするものだと考えられたという<sup>2)</sup>。

このくだりを読むかぎりヘロドトスは、メデシアを無理やり連れ去られた花嫁＝被害者の系列に置いており、「子殺しの母」というイメージからはかけ離れていると言わねばならない。

次にメデシアに言及している資料はローマ時代のアポロドロスにまで飛んでしまう。紀元1世紀から2世紀の作と言われる『ビブリオテカ』である。これを読むと、メデシアはティタン族の古い神々の血筋をひく、由緒正しい女神とされている。父はアイエテス、母はエイデュイア。アイエテスの父は太陽神ヘリオス、母はペルセイスといって、オケアノスとテティスの娘である。つまり父方の祖父は太陽神、母方の祖父は大洋の神、祖母も海の女神である。伯母として魔術に長けたキルケがいる。

メデシアの名は『歴史・下』にもう一度出てくる。前7世紀に、イラン・アッシリア・カッパドキア・バクトリアを領した広大な王国が興隆し、その国の名は「メデシア」と呼ばれているが、女神メデシアがその名祖であるというのである。

「メデシア人は、昔は誰からもアリオイ人の呼称で呼ばれていたが、コルキスの女メデシアがアテナイを逃れてこのアリオイ人の許にきてから、この民族もその名を変えたのである。これはメデシア人自身が自国名について伝えているところである」<sup>3)</sup>

ヘロドトスが伝えるこの説明は、単に名前が似ていることからギリシア人がでっちあげた話であって、メデシア人の伝承であるかどうかは疑わしいという証言もある。いずれにしてもヘロドトスにとって、メデシアとはヘレネやエウロパと並ぶ、遠い神話に登場する、アジアからやってきた女神である。

ここでメデシア (Μήδεια) という名前の意味について考えよう。この名前はメドゥサやメティスと同じく、サンスクリット語 medha (知恵の女声形) から

由来するもので、「賢い人」という意味である。また冥想 (méditation) と語源を同じくして「深く考える」という意味も含んでいる。ギフォードによればメデシアは「薬」とも深い関係があり、女性の治療師の元祖であって、魔法の大鍋のなかで死者を蘇らせることができたという<sup>4)</sup>。だからメデシアは「癒す女性」という意味を含む。バラバラに切り刻んだ羊を大なべに入れて若い羊として蘇えらせる力を持っていた。このパフォーマンスを見たペレウスの娘たちは自分たちの父親が長生きすることを望んで、父をバラバラに切り刻み大なべに放り込んだが、再び生き返ることはなかった。こうしてメデシアはまんまとペレウスを殺したという話は、この神話から由来すると思われる。

さてヘシオドスは、メデシアがイアソンとの間にメデイオスという立派な息子を産んだと伝えているが、アレキサンドリアの注釈者であるパルメニスコスの報告によれば、メデシアはイアソンとの間に7男7女を成したという。その長男が前述のメデイオスであり、アジアの大国メデシアの王となったという言い伝えがある。しかしメデシアの14人の子供たちについては驚くべき言い伝えも残っている。彼らは母に殺されるどころか、コリントス人たちが石を投げて子どもたちを全員殺したというのである。

詳細はこうである。メデシアにはコリントスを支配する正統な理由があった。何故ならメデシアの父アイエテスはコリントスの正統な王になるはずだったが、コルキスに移住することになって、コリントスには摂政を残して去った。しかしその後コリントスという名の篡奪者が国を支配するようになった。この篡奪者が世継のいないまま死んだので、メデシアが王位を要求し、コリントスの人々はその夫イアソンを王として迎えることになった。こうして10年間は無事過ぎたが、イアソンは自分が王になれたのは、野心にかられた妻がコリントスを毒殺したからではないかと疑うようになった。妻に嫌気がさしたイアソンは、メデシアと離婚してテバイの王妃グラウケーと再婚することを決意する。メデシアは殺人を否定はしなかったが、大いに怒り、自分のおかげでコリントス王になれたではないかと言いつのった。イアソンは「確かにそうだが、今や国民はメデシアよりも自分のほうを愛している」と言い返して、さらに妻に冷たくあたる。

メデシアは素直に夫に従うふりをして、自分の子どもを使者として、婚礼の贈り物を差し向けた。それは黄金の冠とまっ白な長いドレスであった。グラウケーがそれを身につけると、たちまちのうちに衣装は燃え

上がり、大きな炎が上がった。グラウケーは泉に飛び込んだが、炎の力は強く焼死した。婚礼に参列するためにテバイからやってきたクレオン王や賓客たちも残らず焼け死んだ。イアソンだけは窓から飛び降りて助かった。

これを見たゼウスは、メディアの心意気にすっかり惚れ込み、彼女に恋するようになった。しかしメディアはゼウスの求愛をきっぱりと断ったので、ヘラはおおいに感謝し、「おまえの子供たちを私の神殿のいけにえの祭壇に横たえれば、不死の身にしてあげよう」と約束する。メディアは言われたとおりに子どもを神殿に預け、王位をシシュポスに譲ったのち、祖父ヘリオスが差し向けた蛇の引く戦車に乗ってコリントスを逃れた。

コリントス人たちはメディアの仕打ちにおおいに腹をたて、残された子どもたちを全員捉えて丘のうえで石打ちによって殺してしまった。しかし後に彼らはこの殺戮行為を深く後悔し、償いの風習を作り上げた。黒衣を身につけ、頭を剃った7人の少年と7人の少女が殺戮のあった丘の上にあるヘラの神殿で一年を過ごすという風習である。殺されたメディアの子どもたちは、デルポイの神託によってこの神殿に埋葬されたが、ヘラは約束を守ってその靈魂を不死のものとしたという<sup>5)</sup>。

前8世紀のコリントスの詩人エウメロスは、まったく異なった言い伝えを残している。メディアはイアソンとともにコリントスを統治するよう乞われてやってきたが、そこで生まれた子どもを不死にしたいと願ってヘラの神殿に隠したが、あやまって子どもを死なせてしまったというのである<sup>6)</sup>。

この話を注釈して、イギリスのギリシア神話学者グレーヴスは、ヒエラポリス（トルコ西部）で行われていた、生贄をまつる全燔祭を描いた図象を見たギリシア人がこのような物語を思いついたのではないかと考えている。グラウケーは生贄ではなく、祭りをつかさどる巫女だったろうと推察される。彼女が飛び込んだ泉は巫女が祭礼にしたがって沐浴する場所だったと考えられる。むしろメディアの14人の子どもたちが殺され、その贖罪としてヘラの神殿に子供たちが1年間仕えるしきたりが出来上がったという物語のほうが、かつて大昔には人身御供の習慣があったことを思わせると書き加えている。

グレーヴスが紹介する別の言い伝えを紹介しよう。メディアはイアソンの裏切りの復讐を果たした後、アテナイに逃れてアイゲウス王と結婚して息子を産んだ。

この息子をアテナイ王にしたいと願い、アイゲウスとアイトラーとの間に生まれたテセウスが邪魔になるので殺そうとしたが失敗して追放され、イタリアに渡った。そこでマールビウム人に蛇使いの術を教えたという言い伝えがある。さらにテッサリア、アジア（のちのメディア）を歴訪したといわれる。その後どうなったかというと、メディアは死なずに不死の身となり、エリュシオンの野を治めたという。さらにグレーヴスによれば、エリュシオンでヘラクレスが結婚したのはヘレネではなく、メディアであったろうと主張する。再生の大鍋をつかさどることができるのは、ヘレネではなくメディアであり、メディアはエリュシオンにやってきた英雄たちに、地上で生まれ変わる機会を与えることができるからである。グレーヴスは月の女神セレーネはメディアの別名であったとさえ考えている<sup>7)</sup>。こうした話を並べて眺めると、メディアの前身はアジア出身の大母神であり、ギリシア神話のなかで無限に陥しめられてきた、無数の女神のうちの一人であると結論づけることができるのではないだろうか。彼女の乗り物は翼の生えた蛇が曳く戦車であるが、これも彼女が太陽・月を支配すると同時に大地をも両方を統治すると考えていたことを表している。

このようにメディアは女性らしからぬ野心と能力ゆえに、子どもを殺された母であったとされていたものが、誰かの手によって、夫への憎しみのために子どもを殺す母に変えられたと考えられる。

残っている文献のなかで、エウリピデスより以前に、メディア自身が子どもを殺したとする文献はない。したがってメディアを子殺しの母に仕立てた張本人はエウリピデスであったと断定することはできないが、その可能性は非常に高い。コリントス人からいくばくかの謝礼をもらってエウリピデスは子殺しの話を作り上げたという伝承もある。グレーヴスはエウリピデスの時代には、人身御供の風習はすでに野蛮な風習と考えられていたから、エウリピデスが「とっぴな空想で尾ひれをつけて」不名誉な神話を書き換えてくれたことはコリントスの人々にとっては実にありがたいことであったと推察している。悲劇『メディア』はアテナイの演劇祭で第三位に甘んじたが、それでも書き換えられた神話はただちに宗教的権威を獲得したからである。

### (3) エウリピデスの『メディア』

ここでメディアがどのような心理的過程をへて子殺しがどのように行われるかを、エウリピデスの脚本を

詳細にみてゆくことによって、追ってゆきたいと思う。

プロゴロスは、メデシアの乳母によって語られる。乳母はメデシアがコルキスの女王として生まれたときから仕えてきた。メデシアがイアソンにひと目惚れしたときもそばにいたし、祖国を捨てイアソンと道行するメデシアにもついて行った。ペリアスを大鍋の中で煮殺したときも、乳母は見ていた。乳母ほどメデシアを知る人物はいない。彼女は主人に起こった不幸を縷々説明するが、彼女のいちばんの心配は、メデシアの子どもたちに対する態度が変わったことである。

お子さまたちを見て心を慰めるどころか、顔をみるのもお嫌の様子。

何か恐ろしいことを企んでいらっしゃるのではないかと気がかりでならない。

きつい御気性で、ひどい目にあって黙っておられるような方ではない。

御主人のことならよく知っている。だからこそ心配なのだ<sup>8)</sup>。

乳母の心配は、子どもが母に殺されるのではないかということに集中している。メデシアのことを一番よく知っている乳母のセリフによって、観客は劇が始まる前に、すでに、メデシアが最も効果的な夫への復讐の手段として子殺しを考えているらしいことを知るのである。観客の関心は、メデシアの憤怒が子どもの殺害にまで本当にゆくのか、メデシアの決意がいかに決行されるのかという、恐怖に満ちた興味に集中するように作られている。乳母の結論は恐怖を最大限にかき立てる。

御主人は怖いお方、いったん怒らせたら勝ちにまわるのは無理というもの<sup>9)</sup>。

そこに子守の老人に付き添われて二人の子どもが外出から帰ってくる。子役は「だんまり」で、劇を通じてセリフは一つもない。それが劇のクライマックスにいたると、舞台裏から、殺される瞬間の絶叫で観客をぞっとさせることになる。乳母は子守に、子どもたちが母親の目に触れさせないように注意する。

奥方が野獣のような目つきで子どもたちをご覧になっていました。まるで頭のなかでなにかを企んでいらっしゃるような。私にはよく分かります。お怒りは誰かを完膚なきまで痛めつけねば収まるもので

はありません<sup>10)</sup>。

明確な「子殺し」の予告であるが、この予告は根拠があることが示される。乳母に母親のそばには行かないように言われたのに、子どもたちはつい母親にまわりついたらしい。メデシアは舞台上に登場しないうちから、獐猛な呻き声を響き渡らせる。

憎しみしか知らぬこの母から生まれてきたなんて、呪われた子どもたちよ。おまえの父とともにこの世から消えてしまえ。この家も根こぎにされて流れてしまえ<sup>11)</sup>。

それを聞いた乳母は、さらに「子どもたちの身の上になにも起こらなければいいが」と心配をつのらせ、自分の立場を披歴してメデシアとは程遠い「中庸」にあることを感謝する。

「ほどよい」という言葉を口にするだけでもめでたく、それだけでしあわせをかみしめることができる。

もし出すぎた真似をして神の怒りを買ったなら、いいことは一つもない。家に災いが次から次へと降りかかってくる<sup>12)</sup>。

メデシアの子殺しをはっきりと予告する乳母の立場には、もうひとつ別の役目がある。メデシアの度はずれな憤怒に対する、「普通の人」の「普通の意見」を代表することである。不正がおこったときには怒り、不幸が起こったときには悲しむのはいいが、それに浸るのはよくない。「ほどほど」がよろしいというギリシア的な中庸の立場が、辺境からやってきた女奴隷の口から披歴されるのは興味深い。一般に悲劇では極端に走る主人公に対して、中庸を守る立場はコロスが担うが、『メデシア』では、コリントスの女たちから成るコロスは、始めは夫に捨てられたメデシアに同情的で、メデシアが子殺しを実行する場面になって初めて批判的になる。メデシアに対する第三者の立場がこのように二重であることは注目に値する。

メデシアを憐れみ、少しでも力になりたいと思ってやってきたコリントスの女たちの前に出てきたメデシアは、不幸に見舞われたにもかかわらず、頭の回転は一分のすきもなく、筋道を立てた話ができる理性のある女性として私たちを驚かす。乳母が心配したような野獣の獐猛性は欠片も見られない。メデシアがまた舞



台上に現れないで、セリフだけを聞き、乳母の心配を聞いていたときには、メディアは人間を越えた恐ろしい存在のように暗示されていたが、舞台に現れたメディアには超人間的なところはひとつもなく、あくまで地上的で世俗的である。メディアが辺境出身とはいえ、れっきとした古き女神であると同時代人が考えていたことを考えると、エウリピデスのメディア像はきわめて斬新であったと想像できる。

メディアはコリントスの女たちの前で、有名なフェミニスト的な女性論を披歴する。エウリピデスの時代に、ギリシアの女が置かれていた劣悪な立場を、まさしくそこに生きている一女性として冷静に分析しているが、さらにそのうえに、自分が外国人妻であるというもう一つの悪条件をも分析している。

やがてクレオン王が現れて、国外追放が告げられる。メディアは自分の立場をよくわきまえ、ひたすら慈悲を乞い、膝にすがることもしとわぬ。クレオンはメディアの口のうまさに負けて一日だけの猶予を与えてしまう。結末を知っている観客にはわかるが、舞台上のクレオンにもコロスにもわからない皮肉まで交える。

わたくし、夫は憎みます。ですがあなたのなされたことはとても賢いと存じます。

今となっては、あなたの御一家が幸せになるのを、羨ましいとは思いませんわ<sup>13)</sup>。

「クレオン一家の幸せ」とは、やがて来る一家の破滅を指しているのだが、メディアと観客以外はこの皮肉を理解できない。

コロスは、夫に捨てられたうえに国外追放というもう一つの不幸に襲われたメディアに深い同情をよせるが、メディアは自信まんまんで「一日あれば、どの手段を選ぶか迷ってしまうほどですわ」とうそぶく。

次にイアソンが登場して、激しい言い争いが展開される。イアソンが、これまた有名な女嫌いの弁をまくしたて、「野蛮な国から文明の進んだギリシアまで連れてきてやったのだから感謝しろ」と言えば、メディアは「野蛮な妻が古くなると、あまり名誉なことではなくなりますのね」と言い返す。実に弁のたつ女性である。男と女の言葉による戦争とも考えられるこのくだりは、あきらかにメディアの女としての論説が数段勝っている。

次に、デルポイに行った帰途のアテナイ王アイゲウスが登場する。王が世継ぎの息子を授かる方法をアポロンに伺いに行った帰りであると知って、メディアは

自分の医術をもって必ず子どもを授けてあげると約束をし、その報酬として追放された自分をアテナイで引き受けてくれるように持ちかける。アイゲウスの快諾を得て、退路を確保したメディアはこれ以後、子殺しの道をまっしぐらに進む。

メディアはそれまで子どもを殺そうとは思っていなかったが、世継ぎを熱望するアイゲウスを見て、最も有効な復讐方法は子どもを殺すことであると思いついたという解釈がある。しかしこれまで述べてきた理由から、メディアは子殺しを最初から計画しており、アイゲウスのエピソードは、世継ぎの男の子を妻から得ることは父権社会にとって決定的に大切なことであり、世継ぎの男の子がないということは夫にとって致命的であることを強調する効果を狙ったものであると思う。

まず夫をよび出して、自分は心を入れ替えた、夫の結婚に賛成する、だから自分はともかく子どもたちの追放は免除するように、新しい花嫁に懇願してほしいと夫にもちかける。それを疑うことなくあっさり信じ込んだイアソンは、メディアがそういいながら涙をあふれさせている理由が分からない。なぜ泣くのかと訊ねられてメディアは「私の腹から子どもを産んだからです。子どもの将来が心配で」と答える。実際は事が計画とおりに進んで、子どもを殺す時間が迫ってきたことを悲しんでいるのだが、「女は弱者、泣くようにできているのです」と言いくるめる。花嫁を喜ばせるために、黄金の冠と薄絹の打掛をプレゼントするつもりだと言う。かならず花嫁に手渡しするように子どもに言い含めながら、こう言う。

さあ子どもたち、この贈り物を手にお取り。お幸せの絶頂にいらっしゃる姫のところに行って行くのです。受け取っていただいて、なんだ、つまらぬものをくれたとは決して思われますまい<sup>14)</sup>。

ここでもメディアの表むきの意味の陰に、二重の意味が隠されている。冠と衣はつまらぬものどころか、姫を殺す凶器となるだろうと暗示しているのである。また次のように言う。

子どもが追放されないようにするためなら、黄金どころか命までもさしあげますわ<sup>15)</sup>。

もちろん表向きの意味は、自分は犠牲になっても子どもの追放から守りたいという殊勝な母親を演じているのだが、実際の意味は「子どもの命を奪っても、追

放の身の上にはさせません」という意味を含んでいてと解釈できる。

メデシアの企みは見事に成就し、花嫁とクレオン王が焼け死んだという知らせを受け取る。いよいよ残るのは復讐の最後の仕上げ、子どもを殺すことである。

ここに至って初めて、メデシアの「子殺し」の決意がゆらぐ。子どもの生き生きした目を見ると心が鈍る、子どもを置いて一人で逃げようか、子どもを殺したら夫は確かに苦しむだろうが、自分は二倍も苦しまねばならないと逡巡する。夫への復讐心と母親の愛が葛藤する場は感動的であるが、長くは続かない。すぐに夫への怒りが勝利を占める。

悲しみにわが身をゆだねよう。私がどんな不幸を引き起こそうとしているかはよく知っている。だがどう冷静に考えても、怒りのほうがずっと強いのだ。それがこの世にひどい不幸を引きおこすとしても<sup>16)</sup>。

こうしてメデシアは子殺しを執行する。舞台の上で殺人は行なわれず子どもが逃げ惑って泣き叫ぶ声が舞台奥から聞こえるだけであるが、それが逆に残酷な殺戮の場面を浮かびあがらせる。コロスたちは大騒ぎをするが、ついに鳴き声が止み、子殺しが完成したことが暗示される。

ここまでメデシアは人並み外れた高い能力と強い意志をもっている人間の女性として表わされてきた。しかしエクソドス（結末）に至って、メデシアは初めて太古の女神にもどったかに見える。舞台の高みにクレーンで吊り上げられた龍の引く車にのったメデシアが子どもの死骸を両腕に抱いて現れる。イアソンがメデシアを人間ではない「メスの豹」「怪物のスキュラ」と罵っても、メデシアは嘲笑うだけである。子どもは岡のうえのヘラの神殿に葬ると答える。これは太古の女神メデシアの言い伝えに沿うものである。またイアソンがアルゴ船の残骸に頭を打ち割られて無残な死に方をするだろうという言言までする。これは人間の力を越えた女神しかできないことである。「子殺し」を成し遂げたメデシアは、断罪されることなく人間を超えた恐ろしい神のレベルに移ったのである。

「子殺し」というテーマは、エウリピデスにとって、最も大きな悲劇のテーマであったと思われる。エウリピデスは7年後に『ヘラクレス』で、さらに20年以上たって『バッコスの子殺し』で再び「子殺し」のテーマを扱った。自分を執念深く憎しみ続けるヘラによって送りこまれたリュッサ（狂気）によって、ヘラクレス

は三人の子どもを敵と信じ込んで次々と殺す。彼は「ゴルゴンのような無慈悲な目をまわし」「口からは泡を吹きながら」、子どもをかばおうとした妻まで殺してしまった。『バッコスの信女』の母親アガウエもやはり口から泡を吹きながら息子の四肢を引きちぎり、もぎ取った首を杖の先に突き刺して「まるで山に棲む獅子の首を取ったように」キタイロンの山から町まで運んできた。バッコスに狂気を吹き込まれた結果である。二人は尋常でないエネルギーで子どもを殺すが、神に操られた人形として殺戮をする。だから狂気が去って自分がなにをしたかを知ったときには、どちらも生きる気力を失い、自己嫌悪のどん底に堕ちてしまう。それに対してメデシアは子殺しのあとも生きる力に満ちているのである。メデシアの特異性はあきらかである。ヘラクレスの子どもやアガウエの息子ペンテウスは悲惨な被害者にすぎないが、メデシアはギリシアの男を罰するために、明白な意図によって自分の子どもを生贄にしたのである。

#### （4） セネカの『メデア』

ヘラクレスやアガウエの場合と違って、神に狂気を吹き込まれたわけではないのに、メデシアという人間の女が、冷静に子殺しを執行できたのはいったいなぜなのか？ いかなる心理的エネルギーによって母は子殺すことができるのか？ エウリピデス以後の哲学者や医者は、この謎を解くために解釈を重ねた。ストア学派の創始者と謳われた紀元前3世紀のクリュシッポスはメデシアの犯行は「裏切られ、辱められた女のリビドー（thumos）の発作」であるとした。メデシアが殺戮直前に「自分はなにをしているのかよくわかっている、しかし夫への怒り（thumos）が理性よりも強いのだ」というメデシアのセリフに注目して、クリュシッポスはメデシアの「この明澄さの混乱」こそ、人間の行為の複雑さを示すものだと考えた。

紀元2世紀の医者であるガレノスは、反対にメデシアは「野蛮な国からきた女であることからくる」すさまじい非合理主義と、極限の理性的態度の間に、引き裂かれた二元論を生きていると主張した。極限の理性的態度とはどのようなものかといえば、例えばローマに共和制を打ち立て、最初の執政官となったブルトゥスの態度である。彼は強い信念を持ち、そのためにはどんなに冷酷な行動も執行できる人物であった。共和制に反対した息子に死刑を宣告し、息子の首が切られる場面にも冷静に立ち会ったという。ブルトゥスの

ような人物とメディアのような人物の違いは、各自の内臓が発する衝動的活力に押されるか否かに過ぎないとガレノスは考えたのである。

紀元1世紀のギリシアのストア学派の哲学者エピクテトスはメディアを例外的な精神力で自由を獲得した人であると定義した。とても受け入れられない侮辱を受けた復讐として、その痛みが自分に戻ってくることをよく知りながらメディアは子どもを殺した。その意味では確かにメディアは自由の人であるが、エピクテトスによればメディアのような強烈な魂の持主は、その強烈さゆえに本当にしたいことをする自由を逃してしまうのだと考える。

エウリピデスが創りあげたメディア像を、ローマ時代の人々は、重要な女性のイメージ像の一つとして受け継いだ。ローマ時代の壺絵にはふんだんにメディアのエピソードが描かれているし、壁絵にも、剣を胸に隠して、無心におもちゃで遊ぶ子を暗い目でじっと眺めるメディア像が幾つか残っている。いちばん有名なものがナポリ美術館に保存されているポンペイのフレスコ画であろう。

紀元1世紀にセネカの悲劇『メデア』が書かれる前に、たくさんのメディア劇が上演されていたらしい。前2世紀に書かれたといわれるエンニウスの『追放されたメディア』を始めとして、少なくとも10篇に近い劇が書かれたと言われている。なかでもオウィディウスの『メデア』は大成功を収めたという。しかしこれらはどれも残されていない。本論では限られた枚数のために、オウィディウスが『変身物語』や『名婦の手紙』などに残されたメディア観が、セネカにどのような影響を与えたかの考察は省略して、セネカの『メデア』を読んでゆきたい。

セネカの劇で最も注目すべきことは、エウリピデスが「人間化」したメディアを、彼は逆に超人間的な魔女の像に戻したということである。エウリピデスは古代の女神の面影を徹底的に剥ぎとって、前4世紀に生きる生身の女性として、人々をぞっとさせたのに対して、セネカのメディアは異界からやってきた訪問者として扱われる。古代の女神は、災禍をもたらす魔女の側面と、繁栄を招くよき女神の側面がまじりあっているのだから、セネカのメディアは、プラスの側面は一つもなく、破壊と恐怖をもたらす徹底的に悪意に満ちた魔女である。

劇はメディアが広場に出て独白するところから始まる。ちょうどイアソンとクレウサの婚礼が行われている最中で、メディアはこの婚礼を激しく呪う。怒りと

苦しみに取りつかれて、バックスの信女のようにふらふらと歩きまわり、怒声をあげ、滂沱の涙を流すかと思うとからからと笑い声をたてるありさまである。

メデアよ、怒りを鎧にするのだ、狂いに狂って破壊へと至る覚悟をするのだ。おまえの結婚の終わりを、その始まりと同じ語で飾るのだ。どうやって夫を捨てる？

夫を追いかけたときと同じやり方しかない。気弱なためらいは断ち切ろう。

罪を犯して作った家庭なら、罪を重ねて捨てるだけだ<sup>17)</sup>。

弟殺しとペレアス殺しで始まった結婚を、どう終わらせるか、メデアはまだ決めていない。「人間どころか神様さえも震え出す悪事」をしようと決心しているだけだ。イアソンの再婚を喜ぶコロスも乳母も、メディアにはどんな同情も寄せないどころか、敵意をむき出しにする。

さあイアソンさま、おぞましきパシス女（メデア）の寢床からお逃げなさい。

荒くれ女を妻として、胸の動悸を隠しつつお義理で抱くのにはお馴れでしょうとも<sup>18)</sup>

そして乳母はメディアにコリントゥスの町から逃げるように勧める。それに対してメデアはこう答える。

逃げ回るのにはもう飽き飽きした  
今からメデアになるのです<sup>19)</sup>。

「メデアになる」とは、それまで装っていた人間の妻という仮面を脱いで、破壊の女神＝魔女に戻ることである。しかし誰を破壊するのかまた決めていない。イアソンと娘の結婚を画策したクレオと娘クレウサを殺すことは、劇の始めから決めていたが、夫イアソンの命だけは助けて「生きているのはメデアのおかげだとありがたく思わせよう<sup>20)</sup>」と決める。エウリピデスと違ってセネカの戯曲では、クレオはメデアに子どもたちは保護してやるから、子どもたちを置いて国から出てゆくように命令する。メデアが子どもを殺すことを思いついたのは、イアソンが「子どもこそが生きがいだ、子どもを失うくらいなら、呼吸を、手足を、両眼を差し出してもいい<sup>21)</sup>」と言うのを聞いて、夫のこの弱点につけ込むのが夫を苦しめる最良の方法

だと決めたからだ。それまでメディアは「子どもなんて諦めます、捨てます、放棄します！」と公言していたのだ。

メディアがクレオとその娘を殺すための毒薬をつくりながら、月の女神ヘカテに祈りを捧げる場面は、劇のクライマックスに至るための最も緊張した見どころである。世にあるありとあらゆる蛇の種族、死にいたらしめるあらゆる毒草、蚯蚓の心臓や梟のはらわたなどを鍋に放り込む場面である。

首尾よくクレオとクレウサの殺戮に成功したメディアはこう言い放つ。

不幸に拉がれて本性が開花した。今の私がメディアなのだ<sup>22)</sup>。

このように、メディアは悪と破壊にさらに一步一步突き進むたびに「自分はメディアになる」と宣言する。メディアはこのセリフによって、どんどん人間の仮面をはがして本性をみせてゆくのである。

エウリピデスはメディアの子殺しの場面をみせず、子どもの悲鳴だけで暗示したが、セネカの劇では殺戮場面がクライマックスとなっている。子殺しを執行するにあたってしばし逡巡するが、それも長く続かない。

子どもは死なねばならぬ。わたしの一族ではないのだから。

殺してもいいのだ、わたしの子どもなのだから<sup>23)</sup>。

まず息子の一人を刃で殺して、かつて自分が殺した弟のための生贄だと宣言する。イアソンが軍をつれて館に攻めてきたことを知ると、子どもの死体をつづぎ、まだ生きているもう一人の子どもをつれて屋根の上に登る。子どもをこれ以上殺さないように懇願するイアソンの目の前で、二人目の子どもを殺す。エウリピデスでは、劇の最後で子どもはメディアによってねんごろに葬られることが暗示されていたが、魔女であるメディアには、子どもに対する愛は微塵もみられず、イアソンを最大限に苦しめるという目的を果たした後は、遺骸になんの意味もない。父親イアソンの悲しみをあざ笑うために、次のような言葉ともに屋根の上から子どもの遺体をふたつとも放り投げる。

では、お父さん、子どもを返してあげましょう。どうぞ受け取って<sup>24)</sup>。

一人になったメディアは、大蛇の引く車に乗って宇宙のかなたに逃げ去ってゆくというところで、劇は終わる。

この徹底した残酷劇を、「異類婚姻譚」にクラス分けするのが簡明であると考え研究者がいる。「若い日に人間の男と恋愛して妻となり、人間世界に馴染んで富を残そうとするが裏切られ、その超能力によって人間を壮烈に罰して去ってゆく」物語であるというのである<sup>25)</sup>。確かにセネカが強調したかったのは、人間ではない魔女が、いかに人間離れた災禍を人間にもたらすかの極限を描きたかったのではないと思われる。セネカによってメディアはふたたび人間離れた超自然に押し戻された。しかし破滅をもたらすが富ももたらした太古の女神ではなく、ヘカテや復讐の女神エリュニユスが棲み、闇と悪のみが支配する闇の世界の魔女である。

## (5) 結びにかえて

鬼の心を奮い立たせて復讐を果たし、彼方に去っていった人間メディアと、人間ならざる異界の鬼としてこの世にしばらく滞在し、再び異界に戻っていった魔女メディア。大きく違う2つのメディア像は、その後のメディアの受容の歴史に、大きな2つの流れをつくった。近代にいたるまで、魔女メディアの流れのほうに、主流だったといえる。コルネイユの『メデ』も、リュリの『テゼ』も、シャルパンティエの『メデ』もそうであった。その後もグリルパルツァーの『黄金の羊毛皮』やアヌイの『メデ』などがセネカを踏襲している。それに対してエウリピデス的メディアは、現代にいたって無数に復活してきた。絶大なる力をもって圧倒してくる社会に対して抗う最も立場の弱い者を代表する旗手としてメディアが復活する。これらの流れを一つ一つ辿り、そこに流れる男女の力関係のダイナミックスを研究するのが今後の課題である。

## 注

- 1) ヘシオドス『神統記』廣川洋一訳、岩波文庫、1992年、123ページ。
- 2) ヘロドトス『歴史・上』1巻2. 3。松平千秋訳、岩波書店、1972年、10-11ページ。
- 3) ヘロドトス『歴史・下』7巻61、松平千秋訳、岩波書店、1972年、51ページ。
- 4) Edward Gifford, *the Evil Eye*, New York Macmillan, 1958, p. 131.
- 5) ロバート・グレーヴス『ギリシア神話 下』高杉一郎訳、紀伊国屋書店、1973年、207-209ページ。



- 6) 『ギリシア悲劇全集 5』「メーデイア」解説，丹下和彦，岩波書店，1990年，390ページ。
- 7) ロバート・グレーヴス『ギリシア神話 下』高杉一郎訳，紀伊国屋書店，1973年，210－211ページ。
- 8) *Les tragiques grecs, Eschyle, Sophocle, Euripide, Théâtre complet avec un choix de fragments*, Traduction nouvelle, notice de Victor-Henri Debidour, La pochethèque, 1999, p 814, このフランス語訳を上村が訳したもの。以下同様。
- 9) Ibid., p 814
- 10) Ibid., p 815
- 11) Ibid., p 815-816
- 12) Ibid., p 816
- 13) Ibid., p 820
- 14) Ibid., p 831
- 15) Ibid., p 838
- 16) Ibid., p 841
- 17) 『西洋古典叢書 セネカ 悲劇集 1 メデア』，小林標記，京都大学学術出版会，1997年，249ページ。
- 18) 同書，252-253ページ。
- 19) 同書，258ページ。
- 20) 同書，256ページ。
- 21) 同書，286ページ。
- 22) 同書，311ページ。
- 23) 同書，313ページ。
- 24) 同書，321ページ。
- 25) 同書，451ページ。